

「運命とはどういうことか？」

2018年5月19日(土) 15:00-17:00

参加：16名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・初参加者2名を含む総勢16名で、主に、運命とはどういうことか、なぜ他の言葉（必然）ではなく運命と呼ぶのかについて話し、考えた。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- ・「運命とはどういうことか？」という今日の問いを確認して、早速対話を始めた。
- ・対話前に参加者の立場を確認しておくため、運命があると思うかどうかを確認し、次の結果となった：
 - ・ある：7名、ない：4名、分からない：2名。

(1) 運命の定義は？（その1）

- ・自らによらない存在、時間、出来事ではないか。
- ・他の言葉で代えられる。後で言っていることで、本人、または、本人以外の他者の誰かが命名する。
- ・複数ルートがあり、どのルートでも通るであろう／通ったかもしれない合流ポイント（点）である。
- ・選択が複数あったときに迷うが、その迷いをも含むプロセス（線）である。例えば、大学受験で東大と早大で迷ったときに、結果では早大に進んだ場合は、その迷いから早大に進んだプロセスを指す。
- ・未来が決まっている前提で対話しているが、事前に決まらず過去を振り返ったときに決まる。
- ・参加者から辞書による定義はどうなっているかという疑問が挙がり、以下の2つの定義を確認した；
 - ① 人の意思を超えて幸せ／不幸を与える力、② もとから定められた巡り合わせ

(2) 運命とはどういうことか？

- ・世界には自然界の物質と高度な知能を持つ人間の精神がある。物質は自然法則で決められているが、人間の精神には自由があり、自然に力を加えられる。世界はこの2つが混在していてどう考えるか。
- ・運命共同体の運命とは、なりゆき、利害一致という意味で、対話してきた運命とは異なるように思う。
- ・運命の運は、良い、悪いと表現するように、価値判断がある。反面、偶然には、この価値判断はない。運命の命は、ある意思があって決めるということで、神や法則等の自分の意思とは別の存在が決める。

(3) 運命はあるかないか？

- ・運命とは、自分の能力を超えた状況を想像すると、運命と言わざるを得ない場面がありそうである。
- 運命を感じた瞬間として自分の経験では、山の中を歩いていて、雷が鳴ってきたときに、「ここで雷が落ちたら運命だなあ」と思ったことがある。幸いにもそのとき雷は落ちずに死ななかった。
- ・運命はあると思っており、その運命を私達は知らないだけで、全てはその運命であらかじめ決まっていると思っている。

(4) 運命の定義は？（その2）

- ・参加者から先の辞書の定義も含めて吟味する運命の定義を仮決めしたいという提案があり、対話した。
- ・2つの辞書の定義では、自由意志さえもが運命で決まっているという概念は含まれないのではないか。
- 上記の考えを加えるべく、③を含めて下記3つを定義とし、これらの定義を基にして対話を進めた。
 - ① 人の意思を超えて幸せ／不幸を与える力、
 - ② もとから定められた巡り合わせ
 - ③ 全てがもとから定められているとする見方
- ・②はない。東日本大震災の被災死亡者や親に殺された乳児等を指して、彼等が殺される／死ぬ運命であったとは思わない。もしそうならあまりに不平等と感じるからである。①はあるかもしれない。
- ・①と思う。ある出来事を偶然ではなく、運命と呼ぶのはなぜか。人生や生き方の話のときではないか？
- 例えば、親からDVを受けて殺された生後間もない赤ちゃん（乳児）を考えると、その乳児には自分の意思でその未来をどうにかできる選択肢も力もないと考えられるため、（想像上の）乳児の視点からは、まさに①の定義の運命と呼ぶしかないが、その親の視点からは運命とは呼べない。
- 乳児には意思もないため、①でもない。運命も分からないので、運命とも思えないのではないか。
- ・人間の死は、必ず誰にでも100%いずれは起きることであるため、死は③の運命である。

(5) なぜ他の言葉（必然）ではなく運命と呼ぶのか？

- ・死を考えるとき、確かに人間誰にでも100%起こる。これは、100%起こる、必ず起こる、必然等と別の言葉がある。なぜ、他の言葉ではなく、運命と呼ぶのか。
- 過程は遡れるがいつもは考えられない。スバッと割り切るために、運命と呼び、諦めるのではないか。
- 運命ではなく法則では諦められないのは、大いなる何かの存在でないと諦めきれないのではないか。
- ・その理由は人間が全ての法則を理解できていないからではないか。不可知領域が減ってくると、運命・偶然を使う場面が減ってきているように思う。
- 運命を使うのは、その出来事を含む人生を自分が思う美しいストーリーにしたいからである。
- ・結婚相手を運命の人と呼ぶ。そう思わないとその人に決められず、思うことで他にはいないと思える。
- その人を運命の人と呼ぶことは、せっかく自分の意思で決めたいのに反して、自分の意思ではない、自分を超越する存在の意思が決めたことと諦めることにはならないのか。
- 諦めるというより、自分を超越する意思をサポートしてもらおう／背中を押してもらおうという心情である。
- ・付き合っている人から別の人へ乗り換えるとき、その別の人を運命の人と呼ぶ。自分の人生の方向が大きく変わるとき、重大なときに運命を使う。それは、自信がないときであり、一種の言い訳である。
- それは、意味の空白に耐えられないということである。
- ・③は、自由意思を運命に含める見方なので、そうであれば、人は努力することを止めるのではないか。
- そうではない。人が努力をすることもその運命に含まれているので、努力はしなければならない。
- 人生をドラマティックにしたい気持ちはある。インドでは全てはガンジス川の思し召しと言われる。
- ・辛い／不幸な局面で運命とする一方、成功したときは自分の成果とする。都合良く使い分けしている。
- 運命は、自己効力感とトレードオフの関係にある。
- ・上記運命の定義に沿って参加者に立場を再度訊くと、①：2人、②：0人、③：3人、④ない：4人、⑤分からない・保留：7人という結果となった。

3. まとめ：

- ・対話前と比べて終了時には、運命について分からなくなった人の割合が増えたようである。運命と人間の努力による自己効力感との関係については深める時間がなくなってしまったので、読者の黙考に委ねたい。

以上